

大型丸木船が転用された井戸杵

— 南秋田郡井川町洲崎遺跡の出土資料から —

庄内 昭男*

1. はじめに

洲崎遺跡は、中世集落として営まれた年代も長く、秋田県でもずぬけた規模を誇る遺跡である。そこで確認されたのが、ここに紹介する大型井戸杵である。1998年の発掘調査において出土状況や位置図などの記録は済んでいたが、井戸杵自体が大型で水をすってかなりの重さがあったことから、調査最終の段階をまって重機で遺構周囲を掘り下げ、取り上げを行った経緯がある。その際、県内では中世の大型木製資料の保存例がなかったこと、リニューアルを前にして県立博物館での展示活用が考えられたことから、考古担当としての判断で博物館において水漬けのまま保管することとした。

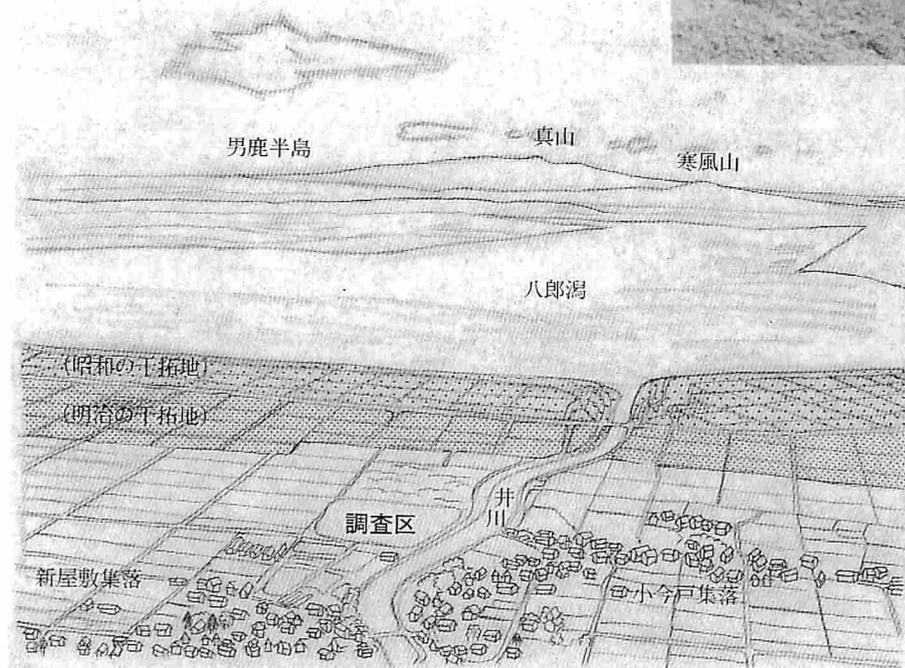
あまりにも大型であり、多額の保存処理費用がかかることから、処理のめどがたたないまま長い時間が経過していった。ようやく、保存処理研究所の協力を得て2か年の処理を終えたのが、2007年であった。

処理を済ませたことで、井戸杵自体の図面化の作業を行うことができ、組み立てることで井戸杵となる以前に丸木船として使用された可能性があること、しかも二体がきっちりと接合できることが確かめられた。そして、これまで八郎潟周辺で確認されている丸木船との関連や、遺跡そのものの性格を考える上で、大切な資料であることを再認識し、ここに実測図を添えて報告することとした。

したがってこの出土木製品の名称は、大型丸木船転用井戸杵とした。



調査中 (303/P28)



洲崎遺跡の景観 (303/巻頭図版一)

*秋田県立博物館

2. 洲崎遺跡と中世の景観

①周辺の遺跡

遺跡のすぐ北側を流れる井川は、東にそびえる俎山を源としており、標高70～90mの丘陵地をぬうように流れ、西の八郎潟に注いでいる。

丘陵地の井川北岸には比丘尼Ⅰ館・館岡館、南岸には比丘尼Ⅱ館・築館が、そして八郎潟や平野部を見下ろす先端には坂本湊城が位置している。丘陵下から八郎潟までは標高5m以下の平地が3kmも続いており、これまで遺跡の所在は確認されていなかったが、中世の板碑群が見つかった。今戸・実相院の一群と新屋敷墓地の一群があり、洲崎遺跡のすぐ近くに位置するのが、新屋敷墓地の板碑群である。安山岩製の自然石を板碑としたものであり、建立された年代と大きさを表1>(註1)にまとめた。なお、八郎潟周辺では、中世の営みをも語るかのように街道沿いの主な集落毎に板碑が点々と確認されている。

建立年	梵字	紀年銘	長/幅/厚(cm)
1334	キリーク	建武二 廬阿	95/55/35
1335	キリーク	建武二 廬阿	124/60/50
1341	バン	妙意暦応四年四月	94/46/56
1342	ア	康永元年 家高	101/60/50
1345	ウン	康永四	99/36/42
1346	キリーク	康永五 沙弥行忠	138/75/50
1347	アク	貞和三	138/75/50

表1 新屋敷墓地板碑群と紀年銘



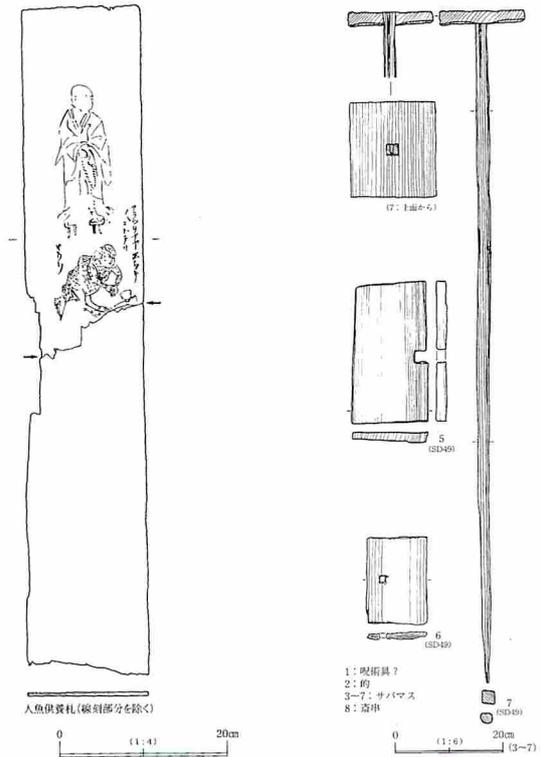
新屋敷墓地板碑群 (303/P10)

②遺跡調査から

遺跡は八郎潟の東岸にあり、八郎潟に注ぐ井川にそって7,000㎡が調査された(註2)。主な検出遺構は、115棟の建物跡と井戸跡である。検出された井戸跡の数は330基とずぬけているが、木枠の構造から4タイプに分かれる。建物跡は方向性があり、溝をとともなうことから塀のような施設で区画されていた可能性がある。建物跡が集中する区域は高台では大きく4群にわかれている。井川は現在八郎潟に向かってほぼまっすぐに西流しているが、かつての井川は洲崎で北に大きく蛇行していた。その蛇行域を利用するように堀が築かれ、大がかりな土木工事もともなっている。

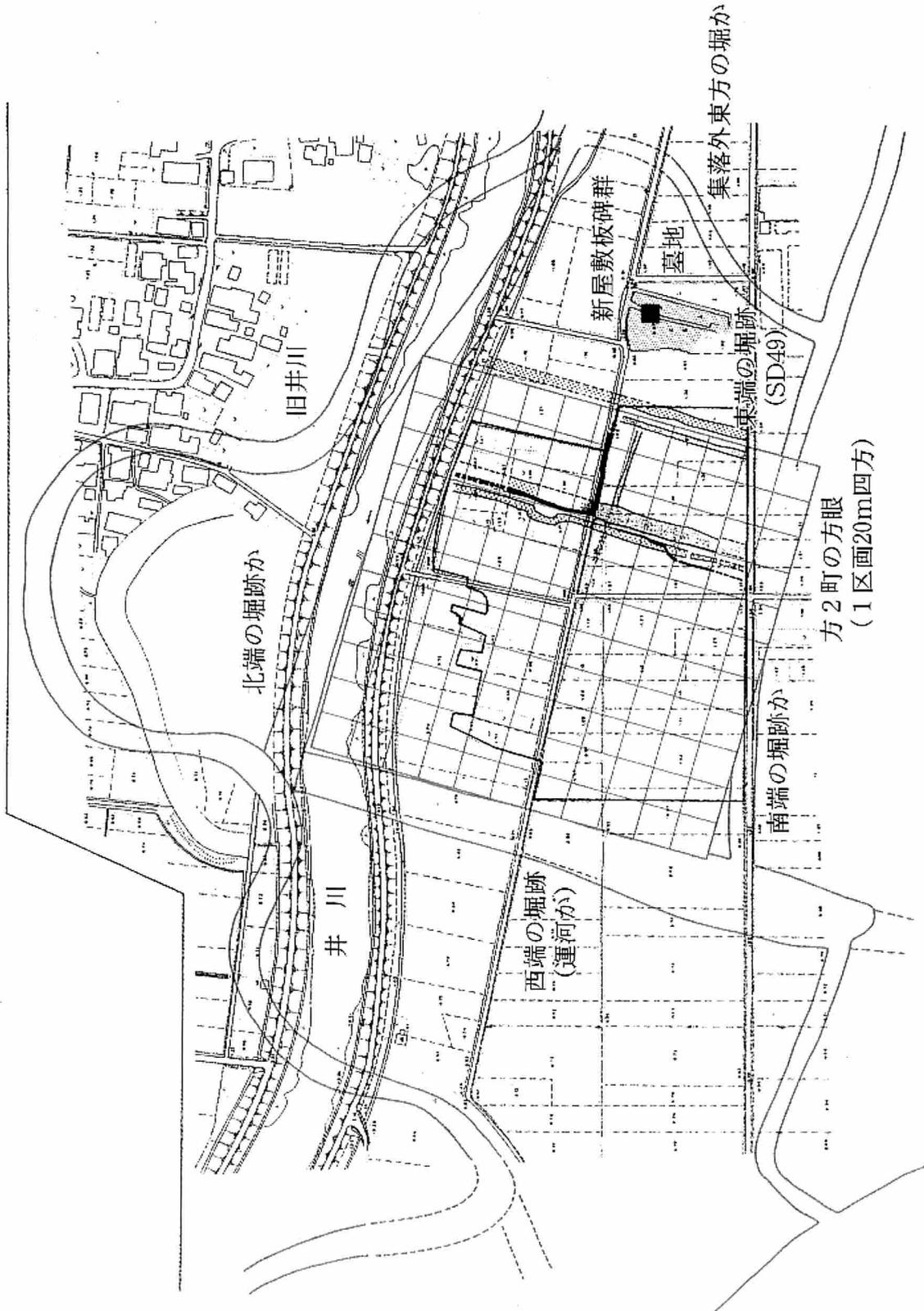
出土遺物は、生活用具としての陶磁器は中世の珠洲系陶器などが出土し、13～16世紀に年代が当てはまる。漆器は碗や皿である。生業に関わる資料として漁労用の浮木、儀礼にとともなうサバマスや人魚供養札が出土している。

こうした大がかりな土木工事をもって形成された集落であり、板碑群が極めて近い位置に存在すること、人魚供養札の出土など公的な儀礼を取り込んでいることから、いわば中世的な都市としての色合いが濃い集落遺跡とみられる。



人魚供養札 (303/P38)

サバマス (303/P386)



地積図・土壌図から推測される堀跡の位置 (303/P441)

3. 船転用井戸枠と関連遺構

『洲崎遺跡』として出された発掘報告書では、井戸をその外枠構造によって類系化しており、「丸木船の縦方向内向きに合わせて外枠とした」船転用の井戸枠をA型としており、SE04・SE295・SE582・SE587の4基が分類されている。井戸内からはそれぞれ珠洲系の中世陶器が出土している。

その4基の遺構位置について見ると、SE04・SE582・SE587は、SD666・676の堀の西側にあたり、3基が近い位置にある。SE295は調査区の南東にはずれている。SE04・587は堀の方向に平行で、特別な位置取りにある。また、内底に曲物容器の水溜施設を有するなど、構造的にも共通している。

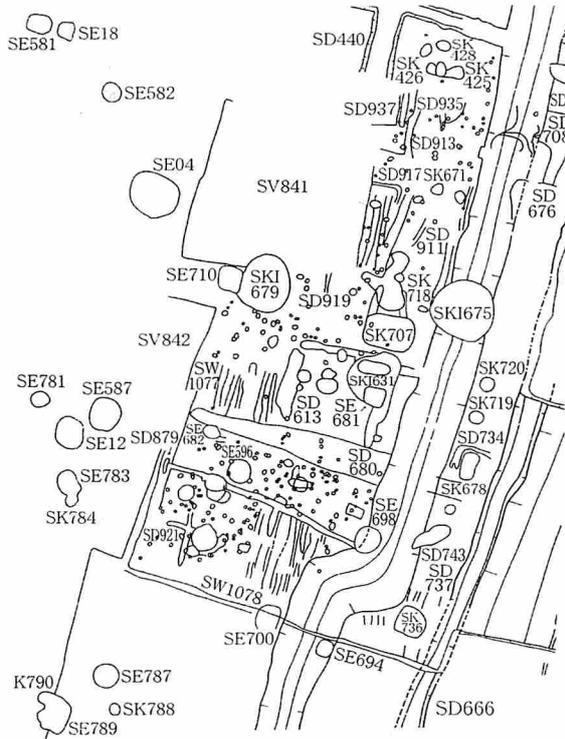
井戸枠にする以前の船の使用部位で分けると、船の胴体部を使用しているものがSE04・295・582で、船の先端部を使用しているものがSE587である。

井戸枠にする際の切断方法で分けると、鋸で切断されているのがSE295である。斧によるものがSE582・587である。SE04は、側を鋸で、底を斧で破断している。

表2には井戸枠として現存する大きさを示した。

番号	現存長	最大幅	内底幅	側面高	内法高	厚さ(cm)
582	112/115	73/73	50/50	38	32	5.0~9.0
587	102	87	50	32	28	6.0~7.0
	91	91	56~62	38	34	7.0~8.0
295	76/83	68/70	48/58	32	28	3.5~7.5

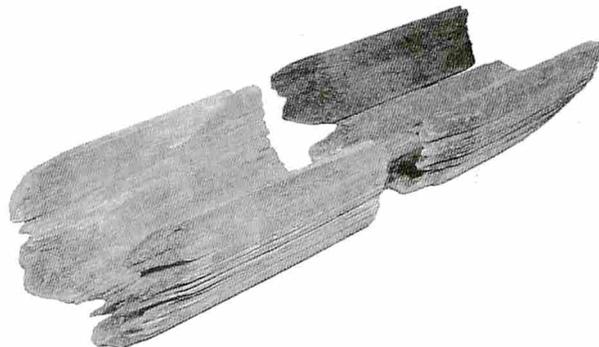
表2 船転用井戸枠の遺存寸法



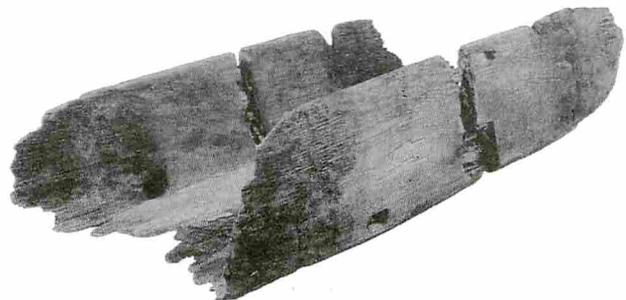
井戸位置図 (303/付図)



SE587 (303/P41)



SE582 (303/P35)



SE295 (303/P32)

4. SE04井戸枠の大型丸木船として考察

SE04の大きさは以下のとおりである

現存長	最大幅	内底幅	側面高	内法高	厚さ(cm)
130/136	124/124	71/72	54	46	4.8~8.4

SE04 井戸枠の用材、加工方法の考察結果は、以下のとおりである。

<船としての加工>

- 1 一本の杉を削りぬいている。
- 2 節の数が少なく、節の間隔があいていることから、根元に近い部材を使用している。
- 3 鋸と斧による破断面をきっちり合わせることで、Aに対してBが狭まり、Bが船の先端に向かっていくものと判断された。1.2mに対して10cmほど狭くなっていく。
- 4 手斧によりほぼ厚みが均一に加工されている。痕跡から内側にある手斧の幅は5cmである。
- 5 ちきりがAの内底とBの外側に各一カ所ずつある。それぞれは裏から表へとあるいは裏から表へと貫通してはいない。
- 7 内側二カ所に2個一対の浅い穴がある。

<井戸枠としての加工>

地中に深くにあった部分は遺存が良く、主に切断の状態について考察した。

- 1 側面は鋸によって切られ、側面の深さが40cmに達している。
- 2 鋸の切断面を持つ腐食した木片が井戸内からでてきていることから、井戸の上端をそろえるように切断した可能性がある。

以上の考察をふまえ、さらに船の構造に詳しい東京大学の安達弘之氏（註3）からは、船材が貴重であったため、それを利用する際には、部材を余さず利用している場合が多いとの指摘があった。

そこで、改めてSE587の井戸枠を観察したところ、二艘分の船の先端部を合わせて井戸としており、その一方の加工材が、部材の厚さと幅からSE04の先端部となる可能性が強まった。

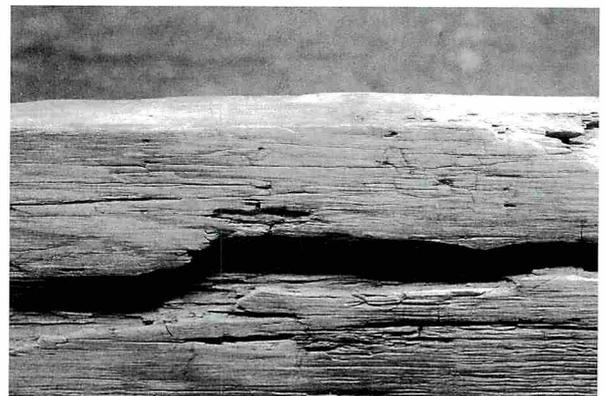
また、船の遺存していない他の部材の使用方向としては、二つの井戸との位置関係から、未調査で終えた堀SD666の橋として使用されたことが想定された。



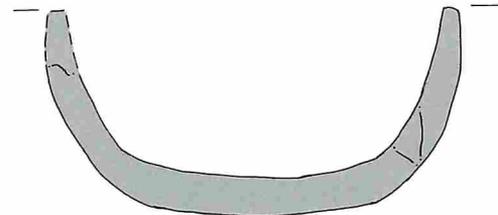
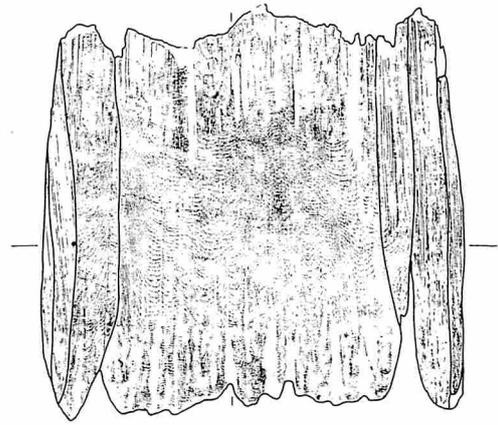
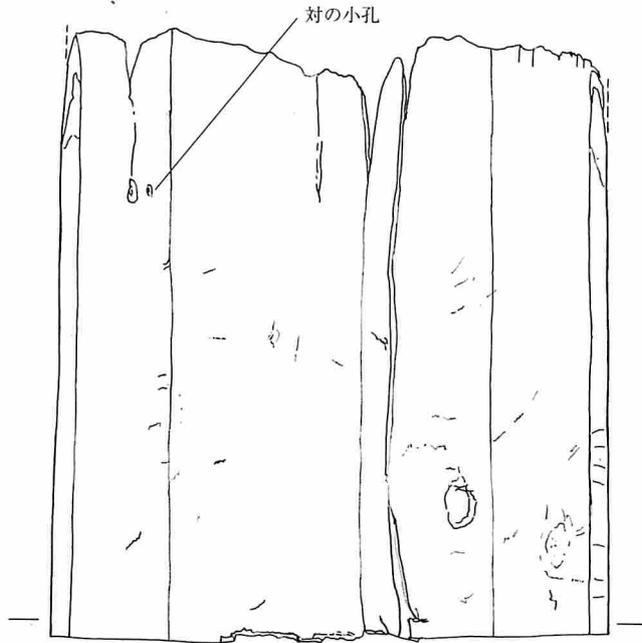
接合部近く



ちきり部分



船べり部分



0 50cm

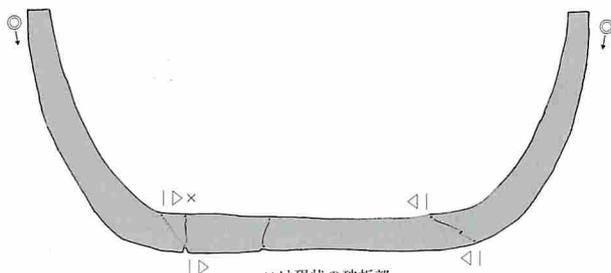


ちきり

SE587部位実測図 (303/P41)

対の小孔

0 50cm



×は現状の破折部
▷は斧による切断
◎は鋸による切断

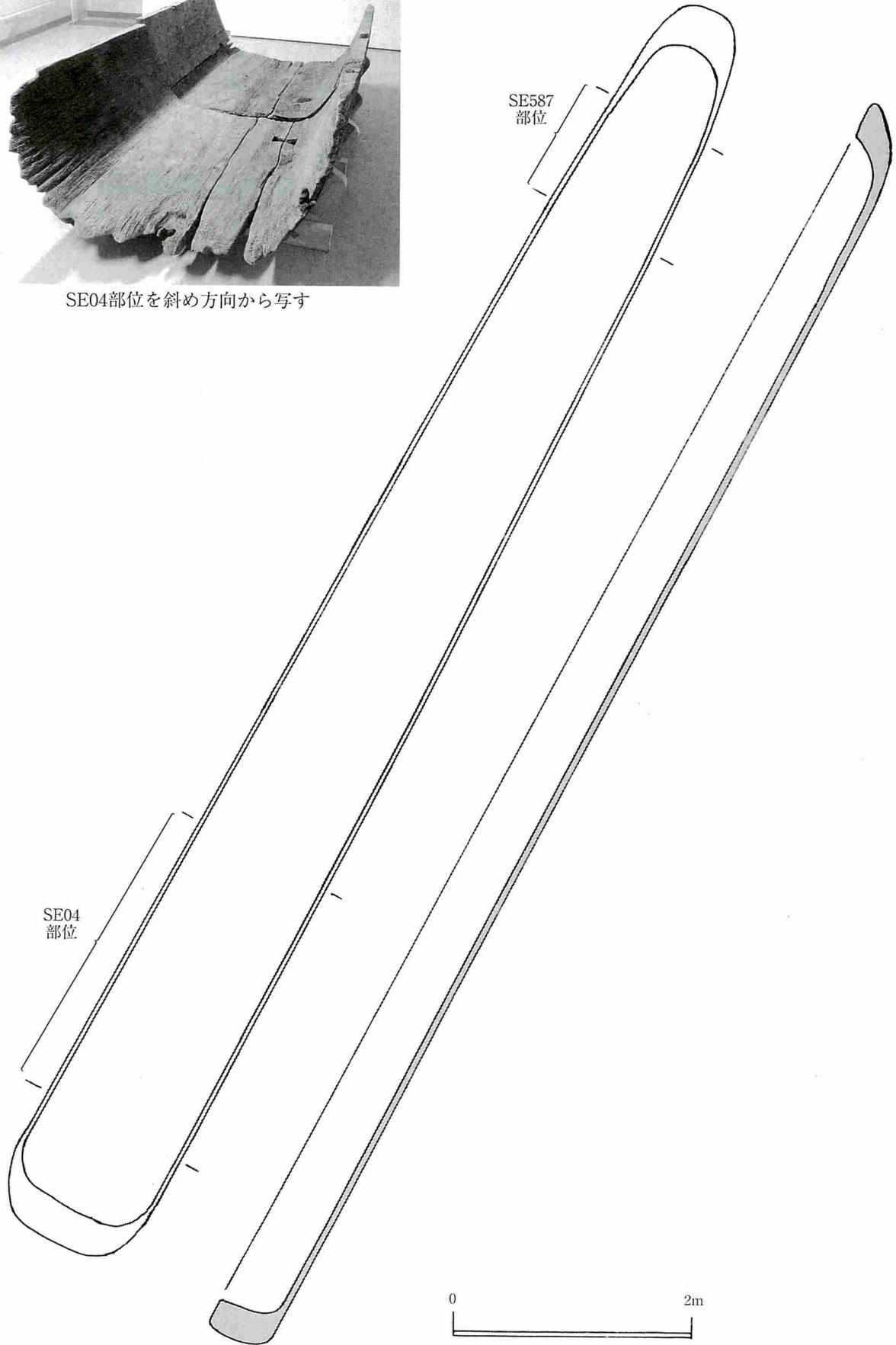
SE04部位実測図



SE04部位を船尾から写す



SE04部位を斜め方向から写す



模式図

5. まとめ

SE587 井戸に使用された立板材は、年輪年代測定によって、1287年の代採年代が示されており、井戸枠として使われた船首部分が作られた年代は、それより10~20年前と推定される。

SE587とSE04の遺存した井戸枠から船の長さを推定してみた。SE587とSE04の長さが2.4mと0.9mであり、700年間で劣化した部位が1m前後とすると、4.5mとなる。他の部位については、船の船首と船尾が1.5m、胴体の部分が未調査の堀の橋桁に利用されたとすると、堀をまたいだ長さが6~7mで、全体はほぼ12mの長さをもっていた可能性がある。

最大の太さが1.25mあることから、樹齢300年以上の大木と推定される。部材の調達は、井川の上流域であろう。20kmほど北に位置する琴丘地域の丘陵地では、古代後半から中世においては鉄の鑄造のため山林が開かれたことから、丘陵地の開発は古代後半にさかのぼる可能性がある、したがって上流部にある杉の天然材を利用できる要素はあったと思われる。また、斧・手斧・鋸といった鉄製工具の発達と普及が、大木の伐採および加工をとまなう大型丸木船の構築に不可欠であったといえる。

安達氏は底が平坦で細長い構造から川船である可能性を指摘していた。物資の流通に利用され、堀が井川から船を引き込む役目をはたしていたものである。

また、SE587の井戸に使用された船首には、幅14cm・長さ80cmの人魚供養札がそえられていた。SE04とSE587の井戸どうしや、堀をわたす橋とは近い位置関係にあたったことが想定される。したがって、この二つの井戸と橋に大型丸木船を転用するきっかけとなった背景には、人魚供養の儀礼との関連があったことが想像される。

末筆ながら、秋田県中央部の丸木船の調査にご協力いただくとともに、本資料の構造面でも適切なご教示をいただいた東京大学安達弘之氏に、また、民俗事例からご意見をいただいた甲南大学出口晶子氏に感謝申し上げます。

(註1) 奈良修介『秋田県の紀年遺物』1951年から抜粋

(註2) 秋田県教育委員会 秋田県文化財調査報告書第303集『洲崎遺跡』2000年として報告されている。本編をまとめるにあたり、遺構図と写真は、報告書より転載した。なお、転載した図には、303集と頁を付記した。

(註3) 2009年10月30/31 安達弘之氏来秋。八郎潟漁撈用具収蔵庫、旧男鹿市北磯小学校、男鹿市文化会館、県立博物館の所蔵する船の観察に立ち会い、構造面での示唆をいただく。

<文献>

川崎晃稔『日本丸木船の研究』1991年

出口晶子『ものと人間の文化史98=丸木船=』

新潟市博物館 展示図録『船の歴史』2001年

* 井戸枠に転用された丸木船の紹介があり、幅が1.2mとある。